大学の学びを基にした図書館内探索行動による興味の発見

小菅　静流

大学は学問から学びを得ることができる場である．一般的に大学生は1，2年生の間で広く基礎を学び，学年が上がるにつれて専門性を高め絞り込んでいく．このような学び方は，学年が上がるにつれて興味を広げる機会が少なくなることにつながる．これにより視野が狭くなり，複数の視点や発想をもつことができなくなる可能性がある．したがって，大学後期になっても広い視野を得るための興味の発見が必要である．

そこで，本研究では主題のある資料群を用いた図書館資料アクセス方法である「トレーシング」による本との出会いに着目し，大学の学びを基にした興味を発見できるかを明らかにすることを目的とする．このような図書館内で新しい興味の発見を起こすにはブラウジングが有効であるとされるが，本研究で扱う「トレーシング」は，興味のある資料を利用して経路を指定することで新しい興味の発見を促す点で新しい試みである．

本研究では，事前調査として実験参加者に知識情報・図書館学類の科目に設定されているキーワード群から興味があるものを選択してもらった．これを利用して実験参加者ごとに「興味のある本」3冊,「興味のない本」2冊の合計5冊選出し，トレーシングを行なってもらった．その過程で興味を持った本を「見つけた本」として持ってきてもらった.「見つけた本」に関連すると思われるキーワードを，事前調査と同じキーワード群から選択してもらった．その後，事前に選択したキーワードと,「見つけた本」で選択したキーワードを比較し，興味に関する聞き取り調査を実施することにより，自覚していなかった興味がトレーシングによって広がったかを検証した．

実験の結果,「見つけた本」に対する「新たな興味として発見した本」の割合が50%以上の人は14人中8人であったことから，半数以上の人は本研究のトレーシングをしたことで新たな興味として本を発見できたことがわかった．しかし,「見つけた本」とキーワードの対応づけをしていなかったため，キーワードレベルでの興味の発見は明らかにできなかった．また興味の変化に関する聞き取りから,「興味の発見」として次の4種類があることがわかった．(1) 元々知らなかった分野への興味の発見，(2) 元々知っていて興味がなかった分野との距離の縮まり，(3) 元々面白いと思っていた分野の再認識，(4) 元々面白いと思っていた分野の解像度の向上である．14人全ての協力者に上記いずれかの発見が起こっていた．

本研究により，大学の学びを基にしたトレーシングは，興味の発見に有効であることがわかった．今後は，どの本がどのような興味の発見につながったかという影響を具体的に把握するための調査が望まれる．

（指導教員　松村敦）